

関西いのちの電話

ふれあうところ…06-6309-1121

2005.2

Vol.122



「風」・「相談員ノート」…P2

「読売新聞掲載記事」……P3

「創立 31 周年記念バザー
開催される」……………P4

「41 期相談員募集」 ……P4

「共感ってなに？」……………P5

「国見峠だより」……………P5

「字 遊 帳」……………P6

K風A

「新しい年をむかえて」

関西いのちの電話 理事長 今村 一之

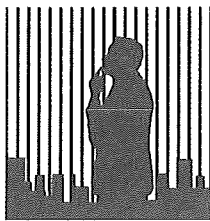
関西いのちの電話は、今年、32年目を迎えます。時の節目、物事の節目で、私が思い起こす一句に論語に依る「温故知新」があります。年頭にいのちの電話を考えるのに良い一句であります。また、論語の冒頭に出てくる「有明自遠方友、不亦楽乎」もよく口にされますが、年賀状を見ながら、その思いを深くいたします。年に一度の年賀状のみで結ばれている数十人の友情が心を熱くします。お正月の至福のひとつであります。キリストよりも約500年前に活躍した孔子は、今も私たちの生活規範となる数々の言葉を遺し、現在なお、日常会話の中にまで生きているのに驚きます。義を見てせざるは勇なきなり。「見義不爲、無勇也」。だれでもこの言葉に押されて、厳しい局面に立ち向かった経験があることでしょう。次の一句も有名です。

「子曰、朝聞道、夕死可矣」朝に（正しい真実の）道を開けば、その晩に死んでもよろこびの境地と思えます、と孔子先生はいわれる。孔子は72才まで生きました。私には、到達不可能。

今、国会で税の検討が進んでいます。富んでいる人々には有利で、貧しい人々に厳しい税制になりそうです。「不悪貧而悪不図」の7文字が多くの人々の心に迫ってきます。また、政治家のテレビ討論会を見ると「巧言令己、鮮矣仁」が思い起こされます。政治家もいろいろ。すべてがすべてとは思えませんが、孔子の時代も現代も、人々の挙動に大きな違いは見られず、その面の進歩がないのは人類の悲劇です。

どうか日本が正しく導かれ、公正な社会の実現に向かうことを願います。

— 共感考 —



37期 T. Y

相談員ノート

生命は発生してまもなく、固有の指向性や癖を獲得し、体組織を育ててゆく。誕生後も、夢を見、内話を重ね、長期記憶を形成し、その人固有の脳活動が、生涯休まず続く。だから、身体的個性も含め、侵せない、尊重されるべき存在である。

茂木が「脳の神経細胞は、外界からの刺激が入力する以前に自発的な活動を行っている」と説明するのは興味深い。一方片山は、自己の欲求や指向は「全て身体が知っている」と言う。脳と身体の視点に違いはあるが、相通じる事が指摘されている様に感じる。

人間は、外界や他者に影響を受ける。その中で、自己に立ち返る事で、係わりは深まる。内に向かえば「経験」で、外に開くのを「共感」と理解したい。

注) 図書 茂木健一郎著『意識とは何か』（ちくま新書434）
片山洋次郎著『整体 楽になる技術』（＼新書319）

本年1月12日付の読売新聞社会面に「10年いのちの旅—阪神大震災8」として、関西いのちの電話相談員のことが取り上げられました。ここに、同紙の承諾を得てその全文を掲載いたします。

(第三種郵便物認可)

2005年(平成17年)1月12日(水曜日)

言 葉

書

だれかの役に立ちたい

10年 いのちの旅 阪神大震災

8

大阪市内にあるビルのフロアに、机がやとと二つ入る小部屋が並んでいる。部屋ごとに電話が一台。咲子61は月に二度、関西いのちの電話の相談ボランティアとして、三時間半座る。生きていくのが苦しい人たちが、ここにか

けてくる。咲子は阪神大震災のあと、この活動に参加した。

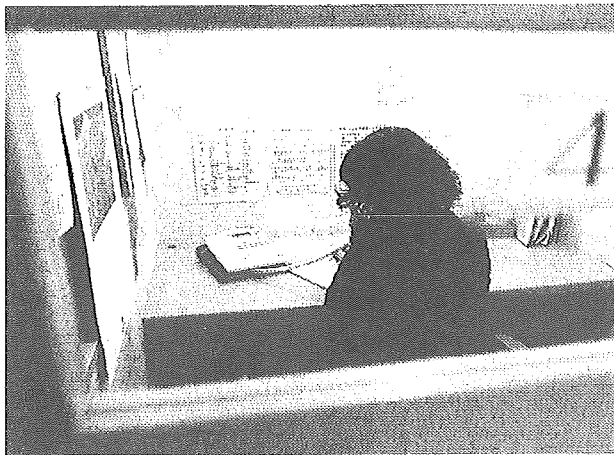
心の中の苦しみ 涙と共にあふれ

その春、いのちの電話のボランティアに応募した。震災の年は「ボランティア

夫と二人の子供、義母とで住んでいた兵庫県宝塚市の自宅が、震災で半壊した。家族は無事だったが、周囲の被害は大きかった。向かいの家の、自分より年若い奥さんが「く」なっていた。人は突然死ぬのだと知らされた。だが、悪いことばかりではなかった気がする。ライフラインがストップし、井戸のある家が水を提供してくれた。高齢者のために若い者が交代

電話相談

相談ボランティアが入る小さなブース。電話線1本、細いけれども、つながりさえあれば温かい(大阪市内で)



が大切だという。実際に電話を受けるまでの研修で、皆の前で自分の話をするプログラムがあった。ところが、話しながら咲子は泣き出してしま

った。心の中にあつた漠然とした苦しみを、はつきりと意識してしまったからだ。*

五人姉妹の五女として生まれた。戦時中で、父は咲子が生まれたとき「また女か」と言ったという。それを聞いて

から、自分を何だか「みそっかす」のように思ってきた。家の手伝いも姉たちができ

きとやってしまい、自分は役に立たない。何の自信も持てぬまま二十一歳で結婚した。

義母との同居はつらかった。まるで子供のように、あれもこれもと要求する。応じることができない時は自己嫌悪に陥った。行き場がなくて、子供を道連れに死のうと思

った。心の中にあつた漠然とした苦しみを、はつきりと意識してしまったからだ。*

わかりあう時 あの温かき

「聞いてもらえて、助かりました。本当にわかりあえたよ、確信できるケースがある。咲子自身が、わき上がる方に満たされる瞬間だ。震災のあと感じた、人の温かさにどこか似ている。自分も、電話の向こうの人も、いつ何時終わってしまうかわからない命と思う。だからそれを、よりよいものにしたと思うのです。十年、悩みながらやってきた咲子の、ひとつの結論だ。そう語るときは、静かで、りんとしている。」

と、咲子自身が思っていた。だが、そうではなかった。「私は、私として生きてきた。涙とともに、気付いていなかった思いがあふれ出た。一人の人間として、だれかの役に立ちたかったのだ。自分も、電話の向こうの人も、いつ何時終わってしまうかわからない命と思う。だからそれを、よりよいものにしたと思うのです。十年、悩みながらやってきた咲子の、ひとつの結論だ。そう語るときは、静かで、りんとしている。」

(敬称略、文中仮名)

(社会部 森川 暁子)



創立31周年記念バザー開催される

平成 16 年 11 月 6 日、博愛社施設内でバザーを開きました。売上金は 110 万円でした。多くの方々からご協力をいただき、厚くお礼申し上げます。

バザーチーム



—バザーを終えて—

この関西いのちの電話にかかわるようになって、「ボランティア」というものについて考えるようになった。何故、ボランティアをするのか。何のためにこの「いのちの電話」をやっているのか。

私は、京都に住んでおり、博愛社まで、バス、京阪電車、地下鉄、そして阪急電車を乗り継いで 1 時間半以上かかる。時間も、そして交通費もかかる。クライアントにきついことを言われることもある。そこまでしてこの「いのちの電話」にかかわっている理由は何なのか。クライアントの話を聴いていて「孤独」「さみしい」という言葉をよく聞くが、人間はやはり、他の人との関係の中で生きていて、「人とのつながり」というものがいかに大切かということを最近特に強く感じる。

もちろん自分の生活している地域の人とのつながり、職場の人たちとのつながりというものはある。しかし、せつかく時間も交通費もつかってこの「いのちの電話」に来ているのだから、単に電話をきいておわりではもったいない。同じ集団の中にながら一度も話をしたこともない人がたくさんいるというのは、本当にもったいない。せつかく「関西いのちの電話」にかかわっているのだから、そのなかで少しでもつながりを広げたい、電話を聞いた後、自分ひとりではどうしようもなくしんどいときがある。相談員も「ひとり」ではできない。そうした「人とのつながり」をつくるのが相談員を長く続ける方法の一つであると思う。たしかに、談話室での会話の中でも広げていくことはできる。しかし、同じ時間帯にブースに入るのは多くて 4 人であり、やはり限界がある。担当だけでなく、研修や部会・チームで博愛社にきても、知った人がいないのではやはり、来ていても楽しくないだろう。そのための一つの機会が「バザー」であると思う。確かにバザーは関西いのちの電話で必要なお金を稼ぐという目的がある。しかし、今年のバザーチームはそれよりも相談員同士の「つながり」をつくるという方針でバザーを行ってきた。「自分が必要とされているという実感」と「ひとりではないという思い」が生きていくうえで必要であるように、「いのちの電話」にかかわっていくためにも必要であると感じる。

そのための「つながり」をつくる機会としてバザーにかかわっていただけるとうれしく思う。

K. F

▼△ 協賛企業名 △▼

江崎グリコ 中京薬品 東リ
なかの 博愛社 (敬称略・50 音順)

第41期電話相談ボランティア 養成講座募集要項

募集期間：2005 年 2 月 1 日（火）～3 月 26 日（土）
養成期間：1 年目 2005 年 4 月～2006 年 3 月
2 年目 2006 年 4 月～2007 年 3 月

なお、詳細については返信用封筒に 80 円切手を貼付の上、下記宛に募集要項をご請求ください。

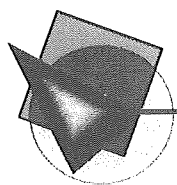
〒532-0028 大阪市淀川区十三元今里 3-1-72
社会福祉法人 関西いのちの電話事務局
TEL 06-6308-6868 FAX 06-6308-6180

カウンセラー養成講座

基礎コース 前・後期 計 113 時間
毎年 4 月・10 月開講 昼・夜コース

系統だったカリキュラムと一流講師による講座は、全国的な評価を受けています。働きながら受講できます。年齢、学歴不問。詳細パンフレットを無料送付します。ご希望の方は、下記までご連絡下さい。

財団法人 関西カウンセリングセンター
〒530-0044 大阪市北区東天満 2-10-41 YFC 会館 3F
TEL. 06 - 6881 - 0300 FAX. 06 - 6881 - 1317
<http://www4.osk.3web.ne.jp/~kscc/>



共感ってなに？ (23)

「受容と共感だけでいいの？」

いのちの電話の活動が日本で始まったのは 1970 年代です。当時電話は固定電話。用件を伝えるための通信手段であったのです。その後、固定電話は進化し、特に子機が付いた頃から、家族一人ひとりが個室で気軽に人とコミュニケーションをとる道具となってきました。さらに携帯電話の出現によってこの兆候は加速されてきました。電話相談は「困難な状況に遭遇した人が」「悩んでいることを誰かに聴いてもらい」「自分の問題を整理し、解決に向けて考え、取り組む勇気を得るために」、電話という道具を使って、用件を伝え解決できればと願っていたと言えます。

携帯電話の普及によって、会って話せばよいようなことでもケータイやメールを使う。

今、茨木市生涯学習センターで「三浦綾子への旅(下)」を受講中で、三浦綾子作品の「天北原野」「果て遠き丘」「帰りこぬ風」「裁きの家」「われ弱ければ一矢嶋楫子伝一」を順次読むことになっている。

講師の榊井寿郎氏は大阪商業大学非常勤講師で、先日「井原西鶴を再評価した」として、大阪市民表彰を受けた方である。また、氏は川端康成、遠藤周作など多くの作家と親交があり、例えば三浦綾子が日記風に綴った「生かされてある日々」には、氏の名前が出てくる程だ。

さて 12 月 3 日、「三浦綾子への旅(上)」で扱った「細川ガラシャ夫人」に因み、その墓を大徳寺高桐院に訪ねようという企画があり、受講生 16 名全員が参加した。大徳寺三門横の石道を辿って高桐院へ、まさに<木に紅葉、苔に散紅葉>の

女子中学生がいま別れた直後、友人に長電話をするといった感覚の延長線上に、ケータイがあるのです。ここでは電話は用件を伝え解決する道具ではなく、つながってほしいあるいはつながりを確認する道具なのです。

近年の受信状況を見ると「寂しい」「死にたい」「一人ぼっちで性的な行動をやめられない」「心の病で誰も相手にしてくれない」などと言って、誰かとつながってほしいと何度となく電話をかけてくる相談者が多くなってきています。電話相談にコミュニケーションの相手を求めているのです。電話相談の基本は、どんな相談者にも受容と共感で、傾聴することです。しかし、つながりのみを求める相談者に対して、それだけでいいのか。自殺など緊急かつ必要な電話が受けきれないのではという疑問が投げかけられています。

これらの相談者が抱える心理的課題は、深刻なものであることが推察できます。素人の相談員では応答できない背景を持っているのです。彼らへの共感を基本にしながら、地域社会と連携していく電話相談活動の枠組みが求められているのです。

長尾文雄

風情である。書院の縁側から庭園に下り飛び石伝いに行くと、細川忠興三斎公とガラシャ夫人の墓がある。一体の鎌倉時代の美しい灯籠墓石だ。高桐院のちらしには、「これはもと利休秘蔵の天下一の称ある灯籠であったが、豊太閤と三斎公の両雄から請われて、利休

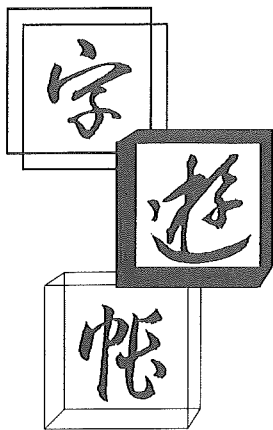
はわざと裏面三分の一を欠き、疵物と称して秀吉の請を退けた。のちに利休割腹の際、あらためて三斎公に遺贈したもので無双という銘を持ちまた別名を欠灯籠ともいう。」とあり、いかにも戦国時代らしい逸話が面白い。

更に光悦寺へ行くという一行と別れ、私は今宮神社を参拝し一足先に大阪へ戻った。

紅葉散るガラシャの墓に詣でけり
壇 清々



細川ガラシャ夫人の墓



題字 30期 S. S

新しい年が明けた。

昨年と同様にこの一年、いくつかの新しい出会いと、それよりも多い別れがあるであろう。いつからだろうか、出会いより別れの方が多くなっていったのは。

親しかった友人
使い古した住所
随分と空欄ができ
身勝手な理由によ
白い部分の多くな



まで、多くの人に支えられ生きてきたのだと、改めて感じる。失ってみて初めて、その繋がり
の深さを実感する。その彼(彼女)ら一人一人の生きてきた年月には、他者である私
には容易には分からないことがたくさんある。だからこそ丁寧に、そしていい距離をもつ

て付き合わなくてはいけないと思うのだが、果たして今までそういう思いできたのだろうか
と自問する。自分の日常に振り回されてしまい、彼らのこころの在りように思いを巡らした
らうか。

人は一人では生きてはいけない。出会いと別れを繰り返す中で、他者との繋がりを確認し、
自分をみつめる。これからも、かけがえのない数少ない友人たちとの繋がりを大切に
していきたい。

29期 N. K

<ありがとうございました>

日本キリスト教団 大阪教会 様 10万円

相談電話受信件数

受信月	10月	11月	12月
受信件数	1,599件	1,535件	2,063件
相談員数(延)	430人	397人	500人

注) ※12月は、フリーダイヤル「自殺予防いのちの電話」を含む。

関西いのちの電話 第23回公開講座

主 題：『心があるから悩むんや。人間やもん！』
～悩むココロと会話する～

講 師：黒田 クロ氏

日 時：2005年3月18日(金)
19:00~20:30

場 所：クレオ大阪西

参加協力費：800円(当日1,000円)

※ お申込み・お問合せは、事務局へ

Tel 06-6308-6868

— 編集後記 —

今年初めての広報紙です。昨年は「災」という字が一年を表す字ということでしたが、本当に否応なく実感できる大惨事が続きました。あまりの悲惨な出来事に言葉がみつかりません。

折りしも今年1月17日は、阪神大震災から10年目でした。人々のかけがえのない命、家族、夢、愛、希望、未来…一瞬に断ち切られたのです。

自然の前の人間のはかなさを思う時、人間同士の争いがなんと虚しいことかと痛感します。

今回のスマトラ沖地震により、私たちの大切な仲間を失いました。無念の死です…。彼女の声、笑顔、優しい眼差し…いつまでも私たちのこころの中で生き続けています。こころよりご冥福をお祈りいたします。

N・K

社会福祉法人 関西いのちの電話

事務局 〒532-0028 大阪市淀川区十三元今里3-1-72
TEL. 06-6308-6868 FAX. 06-6308-6180
発行人 今村 一之 編集 広報・編集チーム
ホームページアドレス <http://www.age.ne.jp/x/kaind/>